早稲田大学 クレジットビジネス研究所 Working Paper
Institute for Research on Credit Business
Waseda University
IRCB21-001

川崎銀行（第百銀行）の遺構が示唆する銀行建築のあり方

－ 佐原三菱館を修復・保存する意義を考える ―

堂下 浩（東京情報大学 教授）、本橋 浩介(佐倉市立美術館 学芸員)、長谷川 純平

本稿は令和 2 年(2020 年) 2 月 19 日に開催された「東京情報大学・香取市 地域連携フォーラム 2020」の講演とパネルディスカッションで討論された内容を中心に構成した論文である。本フォーラムは「佐原三菱館を知る ~川崎銀行が遺した建造物を辿る~」というサブタイトルの下で、川崎銀行が遺した建築物を研究する本橋浩介氏による講演と、佐原三菱館の修復に関わる坂本行広氏（香取市教育委員会 生涯学習課・副主幹)、現存する実際の川崎銀行による旧建物を保有・入居する HARIO 株式会社の辻本真理氏（同社・企画広報本部 本部長)、そして明治から戦中期まで存在した川崎財閥の系譜を継ぐ川崎定徳株式会社の川崎善保氏(同社・監査役)を招いたパネルディスカッション(進行役:堂下浩)の二部形式で実施された。

目　次

１．はじめに 1
２．従来の日本の銀行建築 1
３．川崎銀行の銀行建築としての特徴 2
３．１　優美性としての銀行建築 2
３．２　堅牢性としての銀行建築 4
３．３　街並みに調和するデザイン性としての銀行建築 5
４．川崎銀行と川崎財閥の変遷 11
５．二代目川崎八右衛門 14
６．現在も生き続ける川崎銀行の哲学　-川崎貯蓄銀行富沢町支店を考える- 17
７．結び　-川崎銀行佐原支店を考える- 19

１．はじめに

第 2 次世界大戦中の太平洋戦争以前に日本全国で隆盛を誇り、戦後の財閥解体を待つことなく歴史の表舞台から消えていった川崎財閥（東京川崎財閥。関西の「川崎財閥」とは別）に関する資料は、ほとんどが同戦争で焼失してしまった。しかし、川崎財閥が遺した川崎銀行の遺構のいくつかは、現在、時代を超え目的を変え、なお愛着を持ってその土地に息づいて活用されている。その理由を考える時、川崎財閥の経営哲学が川崎銀行の遺構から見え隠れしているように思える。そこで、建築道楽とも言われた川崎財閥総帥の二代目川崎八右衛門と、明治期にドイツのシャルロッテンブルグ工科大学（現・ベルリン工科大学）で学び、さらには同地で実務経験も積み、大正・昭和期の建築家として名高い矢部又吉が遺した川崎銀行の遺構を手掛かりに、川崎銀行の経営哲学を考えていきたい。なお、本稿は先述したフォーラムの内容に基づくが、川崎定徳（2014）による『川崎銀行史 概史と建築物』からも補足しながら、必要箇所を引用した。

２．従来の日本の銀行建築

明治以降、日本の銀行建築はどのような変遷をたどったのだろうか。

日本の銀行建築について考察するにあたり、明治 29 年（1896 年）竣工の辰野金吾による日本銀行本店本館を避けては通れないであろう。藤森（1993a）も指摘する通り、辰野金吾は設計にあたり、欧米各国の中央銀行を調査し、なかでもベルギー銀行の機能と平面計画、デザイン面においてはイングランド銀行などをモデルにしたとされる。辰野は日本の中央銀行設計にあたり、18 世紀に隆盛したイギリスのネオクラシシズム（新古典主義）を採用したが、装飾性の乏しいそのスタイルは、どちらかというと地味で堅実であり、当時は日銀本店を評して「辰野堅固」などとあだ名されたという。

写真１ 横浜正金銀行本店（写真）

もうひとつ、現在、神奈川県立歴史博物館として利用されてい

る、明治 37 年（1904 年）竣工の横浜正金銀行本店（写真 1 を参照）も明治期の銀行建築の作例として挙げられよう。設計者は官庁建築を数多く手がけ、当時の建築界に大きな影響力を持った妻木頼黄である。ドイツ留学経験のある妻木の横浜正金銀行本店の建物はドイツ建築の影響を強く受け、ドイツ風ネオ・バロック建築とされる[1]。大ドームを備え、バロックの威厳と風格を持った建物である。

では、川崎銀行の本店・支店はどのような銀行建築であったのだろうか。

３．川崎銀行の銀行建築としての特徴

３．１　優美性としての銀行建築

藤森（1993b）によると、明治期の銀行建築は、日本の西洋建築の受容期にあたり、各国のさまざまな歴史主義建築を採用したが、大正から昭和にかけての銀行建築は、ギリシア神殿のように列柱を連ねる荘厳なクラシシズム（古典主義）に収斂し、日本の歴史主義建築の本流となっていった。多くの日本の銀行建築がギリシア建築に回帰し、荘厳さをまとっていったのに対し、川崎銀行本店（写真 2 を参照）は、ネオ・バロックを基調としながらもルネサンス様式を加味し、優美さや優雅さを強調しているように思われる。川崎銀行本店の建築は、矢部又吉の設計で、６年間の工期を経て東京の日本橋に昭和 2 年（1927 年）に竣工した。川崎銀行本店は、直後に、第百銀行と合併して川崎第百銀行となったため、川崎銀行本店として使用された期間は大変短いものであったが、日本橋のメインストリートに面した一等地に本店として建てられていることから、川崎財閥の威信をかけて、同社を代表する建物として計画されたことが想像される。長年、日本橋にその優美な姿を見せていたが、昭和 61 年（1986 年）に取り壊され、現在、ファサード（建

写真２　川崎銀行本店（設計は矢部又吉）

[1] 神奈川県立歴史博物館ホームページより引用する（2021 年 8 月 1 日閲覧）。
https://ch.kanagawa-museum.jp/cultural-properties/building

物の正面から見た外観）の一部が博物館明治村（愛知県犬山市）に移築・保存されている。また、日本橋の本店跡地には川崎銀行本店のエントランス部が遺構として、現在、新築された建物（現在の日本橋髙島屋ウオッチメゾン東京）に僅かながら残されている。

威厳と重厚さが主であった銀行建築に、優美さや優雅さを取り入れた矢部又吉は、横浜正金銀行本店の設計者である妻木頼黄の指導を受けた。矢部はドイツに留学し、大学に通う傍ら建築事務所で建築の実務を学び、フライブルクの歌劇場などの建築にも関わった（日本建築士会連合会（1941））。その後、川崎財閥系の建物を数多く手掛け、ルネッサンス様式を基調とした様式主義建築を手堅くまとめることに手腕を発揮した。矢部を中心とした川崎銀行の建築の特徴は、その優美さにあると言える。

川崎銀行横浜支店（写真３を参照）も、矢部の設計による建物である。この横浜支店は、わが国における「ドイツ派」古典主義建築の傑作（藤森(1993a)）とされる、先に紹介した妻木頼黄による横浜正金銀行本店の隣に建っている。つまり、矢部の師である妻木の重厚なバロック建築の隣に、優美なルネッサンス様式の建物を造ったわけである。なお後述するが、川崎銀行横浜支店は優美さだけでなく、堅牢さを兼ね備えていた点も特筆される。

写真３　川崎銀行横浜支店（左写真は大正 11 年撮影時、右写真は現在の損保ジャパン日本興亜横浜馬車道ビル。一部建物は現存。設計は矢部又吉）

また、東京の川崎第百銀行京橋支店は、昭和７年（1932 年）に建てられた（建物写真は後掲）。同建物もこれまでの川崎銀行の建物同様、装飾的で優美な銀行であった。この立面図は、矢部建築事務所で長年チーフドラフターとして活躍した内井進が手掛けている。内井は、ロシア正教会の司祭をつとめ、全国の聖堂建築に関わった河村伊蔵の次男として生まれ、自身も御茶ノ水にあるニコライ堂建築など教会建築にも関わった（世田谷美術館(2009)）。川崎銀行の建物が装飾的であるのは、あるいは、この内井が教会建築で培ったデザインセン

スによるところが大きいとも考えられる。

ところで、矢部は明治 44 年（1911 年）にドイツ留学から帰国後、川崎財閥傘下の日本火災役員であった早川鉄治の娘と結婚している。こうした経緯からも、二代目川崎八右衛門と矢部の間における関係性の濃さは特筆される。

３．２　堅牢性としての銀行建築

一方で、川崎銀行の建物が優美さとともに堅牢性を兼ね備えていたことを示す写真が幾つもある。

写真４ 震災直後の横浜正金銀行本店（写真中心）と川崎銀行横浜支店（写真左奥）『大正十二年　大震災記念写真帖』（昭和 6 年、山田商店）より

大正 12 年（1923 年）関東大震災直後の写真（写真 4）には、屋根がほとんど崩れ落ち、甚大な被害を受けている横浜正金銀行本店と、その隣に、大正 11 年（1922 年）に竣工した矢部又吉の設計した川崎銀行横浜支店が、ほとんど被害が無いように見える姿が写されている。銀行建築は優美なだけではなく、堅牢でもなければならない、という二代目川崎八右衛門の考えを示す象徴的な写真である。矢部の建物の驚くほどの堅牢性は、川崎銀行の銀行としての経営理念にも通じている。

もう 1 枚は、川崎銀行八王子支店（写真 5 を参照）の写真である。八王子は、昭和 20 年（1945 年)8 月に B29 による大規模な空襲を受け、2 時間にわたる空襲で八王子市街の 80%が焦土となった。この時に八王子に落とされた焼夷弾の量は 1,600 トン。東京大空襲時に落とされた焼夷弾は 1,665 トンと言われている[2]ことから、東京大空襲に使用された焼夷弾とほぼ同じ量が八王子という小さな町に重点的に落とされたといえる。この空襲直後に撮影された写真に一見無傷のように建っている、ネオ・バロック様式を基調とした瀟洒な真っ白

[2] 総務省ホームページより引用する（2021 年 8 月 1 日閲覧)。
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkanbou/sensai/situation/state/kanto_20.html

い建物が八王子支店である。八王子支店の堅牢性を示す大変象徴的な 1 枚の写真である。この大空襲に耐えた建物が、道路拡幅により取り壊されてしまったことは、大変残念である。

優美でありながら、関東大震災や戦災に耐え抜いた、川崎銀行の建物の堅牢性に感動すら覚える。

写真５　空襲後の川崎銀行八王子支店（写真右端。設計は矢部又吉）

３．３　街並みに調和するデザイン性としての銀行建築

都市部において川崎銀行は、目抜き通りに歴史主義建築を建て、その存在を主張しながらも、その建物は街並みに調和する構成要素となっていた。

たとえば、昭和 3 年（1928 年）に刊行されたアサヒグラフの写真記事に、大正 9 年（1920 年）に建てられ、大正 12 年（1923 年）の関東大震災に耐えた川崎第百銀行銀座支店の建物が、銀座 8 丁目の震災復興途中の街並みの中に写っている。また 2 年後の昭和 5 年（1930 年)、新しい建物が建ち並び始めた銀座 7 丁目の写真にも、街並みに溶け込むように建っている（写真 6 を参照)。

また、震災からの復興がほぼ成し遂げられた昭和 7 年（1932 年）に竣工したのが、先述した、装飾的な優美さを具象化した川崎第百銀行京橋支店である（写真 7 を参照)。この建物も西洋建築が立ち並ぶ京橋の角地において、街並みに調和しながら、その存在感を示していたことが昭和 14 年（1939 年）の写真に残されている。

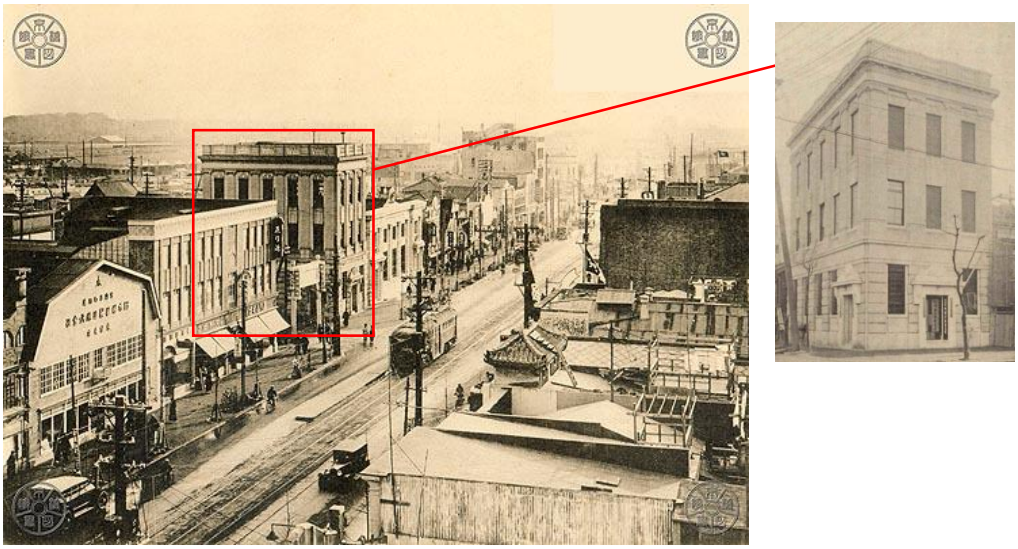

写真 6　川崎第百銀行銀座支店（写真左は京橋区出雲町より芝口方面を望み、写真中の赤枠内が川崎第百銀行銀座支店。写真右はその竣工時。設計は矢部又吉）

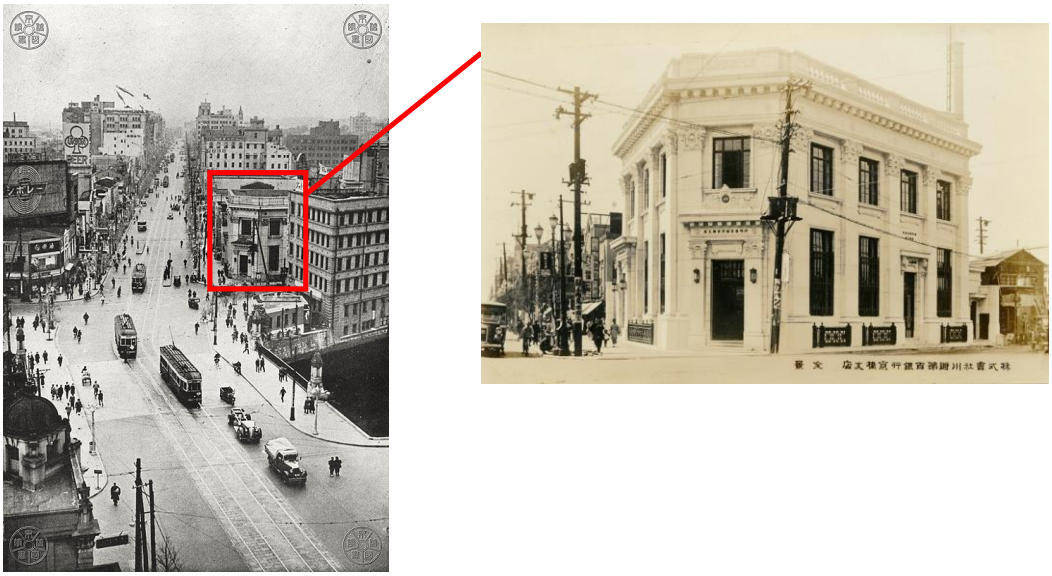

写真 7　川崎第百銀行京橋支店（写真左は京橋から銀座方面を望み、写真中の赤枠内が川崎第百銀行京橋支店。写真右はその竣工時。設計は矢部又吉）

一方で、地方都市においては、川崎銀行の建物は都市部とは異なる理念によって建てられたように思われる。

そこで、地方都市における川崎銀行のデザイン性を考えてみる。

先ず仔細は後述するが、昭和初期の佐原（現在の千葉県香取市）本宿通りの写真（写真 8

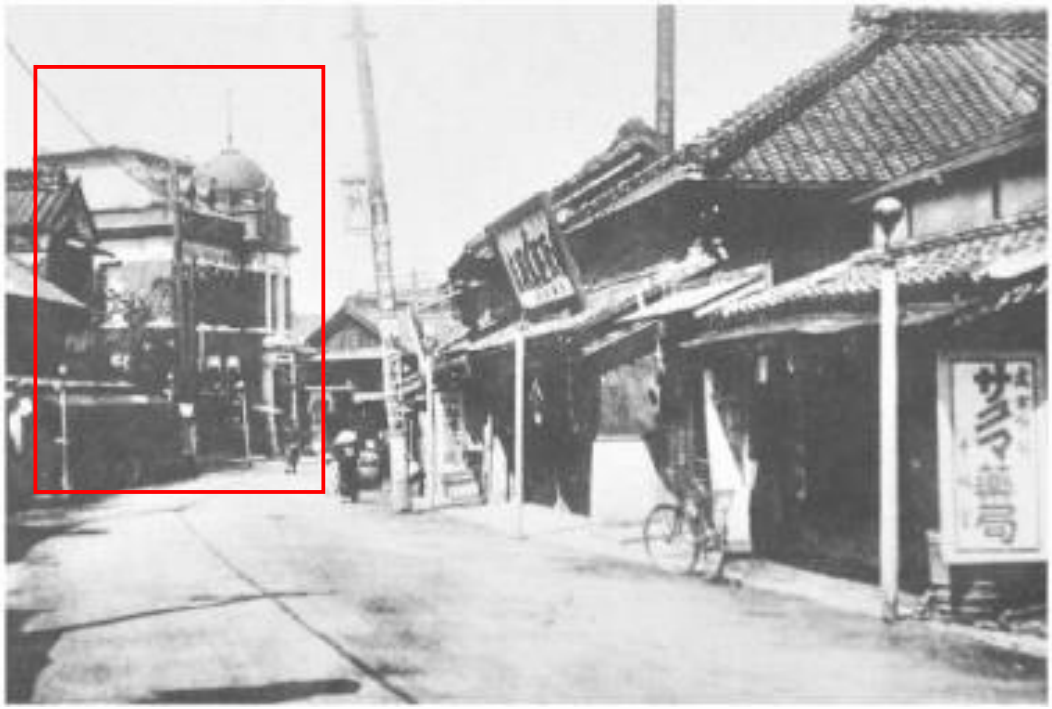

写真 8 大正初期の佐原本宿通りから写した川崎銀行佐原支店（写真中の赤枠部分）

を参照）に、大正 3 年（1914 年）に建てられた川崎銀行佐原支店（現在の佐原三菱館。佐原町並み交流館として活用され、現状は修復工事中）が写っている。当時、都市部の多くの銀行は陸屋根といわれる平らな屋根を採用していたのに対し、佐原支店は、寄棟造りである。旧街道沿いの佐原の周囲の建物は寄棟で、その多くが瓦葺き屋根であった。川崎銀行佐原支店が寄棟銅板葺きを採用したのは、街並みに合わせた結果と思われる。平山・松波（2005）

写真 9 佐倉に存在した 2 つの川崎銀行の支店（写真左は川崎銀行佐倉支店であり、現在、佐倉市立美術館のエントランスホールとして活用。写真右は川崎貯蓄銀行佐倉支店の図面であり、建物は残念ながら現存せず。なお両方の建物とも設計は矢部又吉）

によると、設計は清水組の技師であった大友弘とされるが、大友は明治 21 年（1888）生まれで、佐原支店建設時はまだ 26 歳であったことから、大友が主体となって全体を設計したとは考えにくく、おそらくは、当時、技師長を務めていた田辺淳吉が設計を担当し、大友は実施設計をしたと思われる。クイーン・アン様式の上品で優雅ながらも軽快な雰囲気が街並みと調和している。

また、大正期の佐倉町字新町（現在の千葉県佐倉市）界隈は、軒が低い家が連なり、道路はまだ舗装されておらず、江戸時代とほとんど変わらない街並みであった。昭和初期から 40 年代にかけて、この佐倉の街に川崎銀行の建物として、旧川崎銀行佐倉支店と旧川崎貯蓄銀行佐倉支店の 2 つがあった（写真 9 を参照）。佐倉市教育委員会（2021）の報告書には、これら支店に関して仔細に記載されている。

大正 7 年（1918 年）に寄棟の銅葺きの屋根で、全体は左右対称のレンガ造りの瀟洒な建物である川崎銀行佐倉支店（現在は佐倉市立美術館のエントランスホールとして活用されている）が建てられた。設計者は長年不明だったが、屋根裏から棟札が発見され、矢部又吉であることが判明した。矢部が手がけた銀行建築は、そのほとんどが石造あるいは模造石仕上げであったことから、レンガ造のこの建物は、矢部の作品としては異色と言える。建物には、歴史主義建築の装飾の要素を非常に簡略化したような装飾が見受けられるが、それらの装飾は歴史主義のオーダーからは自由に配されている。これは、歴史主義的建築からの分離を試みる運動が盛んな時期に矢部がドイツに留学したことが背景にあるのかもしれない。大正 7 年当時に、矢部が佐倉にレンガ造の建物を採用したのは、江戸時代と変らぬ街並みとの調和を考えてのことではないかと思われる。実際、佐倉にも洋風建築が建ち始めた昭和 7 年頃に同地区で矢部が手掛けた川崎貯蓄銀行佐倉支店は、コンポジット様式の柱頭を持つ、矢部の得意とした歴史主義建築として建てられていた。川崎貯蓄銀行佐倉支店が建築されてから間もない、昭和 11 年（1936 年）頃に撮影された写真では、この建物が街並みに自然と調和している様子がみてとれる。

そこで当時、川崎銀行佐倉支店と川崎貯蓄銀行佐倉支店の設計に、矢部が佐倉の街並みとの融和性の追求に見せたこだわりを理解する上で、同じく矢部が設計した川崎銀行千葉支

店の作例について触れたい。川崎銀行千葉支店（現在は千葉市美術館さや堂ホールとして活用：写真 10 を参照）は、昭和 2 年（1927 年）に矢部の設計で建てられた。この作風はイオニア式オーダーをかなり忠実に備えた歴史主義建築としている。これも、当時すでに千葉が県庁所在地の都市であったことから、その立地の都市性から採用された様式だったと思われる。つまり、大正 7 年（1918 年）に建てられた佐倉支店と昭和 2 年（1927 年）の千葉支店の 9 年の間における建築デザインの変化は、この間の矢部の建築家としての成長というよりは、街並みの変化を機敏に捉え、街並みに合わせて建築のデザインを柔軟に変えるという一貫した理念によるものだったのではないだろうか。そして、昭和 7 年頃に手掛けられ

写真 10 川崎銀行千葉支店（写真上は竣工時の姿を偲ばせる保存工事前の全体。写真下はさや堂方式という建物全体をもう一つの建物で覆ってしまう保存工事後の姿。なお設計は川崎銀行建築部と矢部又吉）

た川崎貯蓄銀行佐倉支店の設計には、洋風建築が建ち始めた当時の佐倉の街並みにあわせたコンポジット様式を取り入れた歴史主義建築が採用された。

千葉支店の建築様式とその立地する場所の関係性を紐解くと、矢部は城下町の名残の色濃い佐倉の街並みに、大型の本格的な西洋の歴史主義建築は似つかわしくないと考えたのかもしれない。川崎銀行の建物が異質さを放つことなく自然と街並みに溶け込むようデザインされ、街のシンボル、街の顔となっている理由がここにあるのかもしれない。

データをもって比較したわけではないが、他の銀行建築と比べても、川崎銀行の建物は現在も利用され、活用されている事例が多いように思われる。結婚式場、ショールーム、交流館、美術館など様々な目的に合わせた形で保存されている。

川崎第百銀行横浜支店（写真 11 を参照）の跡地には、現在、タワーマンションが建っているが、その一から三階部分は、同支店の外観が正確に再現されている。なお、川崎定徳（2014）の資料によると、川崎第百銀行横浜支店の建物は昭和 2 年（1927 年）に川崎銀行と第百銀行が合併された後、昭和 9 年（1934 年）に旧・第百銀行横浜支店の場所に新店舗として再築されたものである。つまり、写真 3 で示された川崎銀行横浜支店とは別の建物である。

写真 11　川崎第百銀行横浜支店（上写真は再築当時、下写真はタワーマンションの低層部に現存する一部。なお設計は矢部又吉）

また、川崎貯蓄銀行大阪支店（写真 12 を参照）の建物に関しても特筆される。昭和 6 年（1931 年）竣工の同支店は、矢部又吉によるネオ・バロック様式の作品である。様式主義の銀行建築は日本でも開花したものの、これ以降は戦争に向かって贅沢な装飾ができなくなる。川崎定徳（2014）の資料によると、同支店は関東大震災後にアメリカか

ら導入された鉄骨鉄筋コンクリートなど最新技術が採用され、終戦時、ひどい空襲を受けたこの地区（大阪市中央区南船場）で唯一この建物が残ったという。建築家の中村隆治氏は店構えの控え目な赴きとは対照的に、細部に施された重厚な装飾の石彫りは深く、そして力強く、川崎貯蓄銀行における大阪の拠点として往時の威容を忍ばせると、この建物の装飾の特色を指摘している。近年までこの建物に感銘を受けたオーナーの下で、レストラン、結婚式場として活用されていたが、現在は休業中である。

何故、川崎銀行の建物をこうまでしても遺したいのか。川崎銀行が街並みの中で調和しながら、街の雰囲気を高める機能を果たすだけではなく、銀行経営者の確固たる哲学が川崎銀行の建物を通して伝わり、それに呼応した設計者の思いも強く感じられる。このように、公的機関のみならず民間においても遺したいと思わせる建物を、川崎銀行は建てていたといえる。

写真 12　現在の旧川崎貯蓄銀行大阪支店の建物（左写真は現在の全景。右写真は現在のイタリアンレストランであり、建築当初のモザイクタイルが現存。設計は川崎銀行建築部と矢部又吉）

４．川崎銀行と川崎財閥の変遷

では、川崎銀行とはどのような銀行だったのであろうか。

川崎財閥の主体事業であった川崎銀行の原点となる川崎家は、水戸を発祥の地としており、徳川光圀の時代から水戸藩の御用商人としての歴史がある。1640 年代に回漕問屋として出発。利根川等を中心に海運業を営み、水戸藩の支援を得て海老沢に河岸を建設して成功し、回漕問屋として財力を蓄え、幕末まで繁栄した。

一方、養蚕事業で、外資を稼ぐ日本の大産業地の一つとなった佐原は、流通が盛んであると同時に金融ビジネスとしても大変魅力のある地域となった。川崎財閥の初代川崎八右衛

門は当初より佐原に注目していた[3]。明治 13 年に設立された川崎銀行は同年 3 月には佐原に出張所を開設した。その後も関東、関西を中心に支店を増やし、川崎財閥の中核としての機能を果たしていく。当時、政府からの認可を受けた私立銀行としては三井、安田に次いで 3 番目であった。その後、二代目川崎八右衛門によって金融財閥として大きく成長していく。昭和 2 年（1927 年）第百国立銀行を吸収した後は川崎第百銀行となり、昭和 11 年（1936 年）に川崎貯蓄銀行、東京貯蔵銀行を合併し第百銀行に名称を変え、金融財閥の都市銀行として隆盛を誇った。

ところが第 2 次世界大戦のさなか、政府の意向により、金融財閥である川崎財閥の第百銀行の預金が巨大な軍需部門を有する三菱財閥に必要不可欠とされ、昭和 18 年(1943 年)、川崎財閥の中核である第百銀行が三菱財閥に吸収されてしまう。財閥の中枢機能である商業銀行部門を担う第百銀行が消滅したことで、川崎財閥は戦中期において実質的に解体された。ちなみに、三菱銀行が第百銀行（旧川崎銀行）を吸収合併する前の支店数は、第百銀行が 98 店舗、三菱銀行は 50 店舗であった。預金残高は、三菱銀行 5 位、第百銀行 7 位であった。合併後の三菱の支店数は約 3 倍になった。また、合併前の三菱銀行の支店は東京周辺に集中していたが、合併によって京都、大阪、神戸、山陰までに及ぶ地方支店数が増えた。地方支店の預金を本店に集中させて軍需産業への融資を急増させた三菱財閥は、当時の政府や軍部の国策に沿って成長していく。

財閥の側面から、川崎財閥と他の財閥との違いを考えてみる。日本における財閥という名称は、明治の半ば頃に金満家に対して使われ、その後は銀行を中心とした一族の独占的資本集中による巨大グループを指すようになる。

川崎財閥は銀行を核としたグループで、中小の銀行の吸収合併、提携を主とする金融財閥である。三井、三菱、住友の財閥は、銀行以外に多産業を傘下に持つ産業財閥と言う。川崎グループが金融財閥といわれるのは、実際に多くの企業の大量な株式を保有しながらも、その企業の経営には参画しない形で金融事業主体としての立場を貫いたからである。昭和 18 年（1943 年)、三菱銀行に吸収される前の川崎銀行を中心とした川崎財閥は、大正期から昭和 18 年（1943 年）の合併までが隆盛期で、当時における八大財閥の一角を占めていた。

そして、戦中期に国策として川崎財閥は実質的に解体されたが、川崎財閥の銀行機能にお

---

[3] 川崎銀行佐原出張所が開設される前年の明治 12 年には、既に川崎銀行の前身である川崎組の佐原支店が存在していた。なお、川崎銀行佐原出張所は明治 13 年 3 月の開設後、同 31 年 11 月に支店に昇格して、昭和 2 年 9 月の合併により川崎第百銀行佐原支店となった。その後、国策としての統合により三菱銀行佐原支店となった。

いて、その信託部門を担っていた川崎信託銀行のみは戦後も残存した。金融史に馴染みの薄い読者にとっても、昭和 43 年（1968 年）に起きた府中三億円事件は記憶にあるだろう。この事件は日本信託銀行国分寺支店が舞台だったが、日本信託銀行は川崎信託銀行が昭和 22 年（1947 年）に改称した信託銀行であった。戦前期に新興住宅地として開発が進んだ現在の JR 中央線沿線にはリテール金融を行う川崎財閥の営業店が数多く立地されていた。日本信託銀行は 20 世紀の終焉まで財閥グループとは距離を置いて金融界で独自の地位を築いていた。しかし、バブル経済後に経営危機に陥り、2001 年（平成 13 年）に三菱信託銀行（現・三菱 UFJ 信託銀行）へ吸収合併され解散した。なお、川崎財閥の生命保険部門であった第百生命（本社：東京都調布市）は 2001 年にカナダのマニュライフ生命に吸収された。これを最後に、川崎財閥系の金融機関は金融史から消えたことになる。

今日、川崎銀行や川崎財閥が巷間で知られていないのは、川崎銀行が昭和 11 年（1936 年）に第百銀行と改名したこと、さらには、昭和 18 年（1943 年）三菱銀行に吸収合併されたこと、そして、戦前期においても財閥当主であった二代目川崎八右衛門が世間に出ることを嫌う性格であったからかもしれない。

５．二代目川崎八右衛門

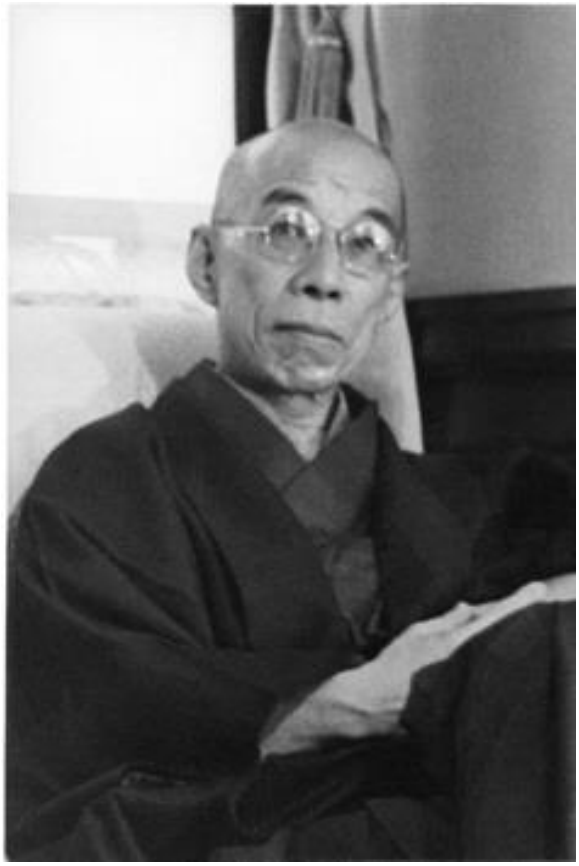

写真 13 二代目川崎八右衛門

建築家・矢部又吉に銀行の理念・哲学を感じさせる川崎銀行の建物を造らせ、昭和 2 年（1927 年）の金融恐慌に際しては堅実な経営手腕が注目された二代目川崎八右衛門（写真 13 を参照）とはいかなる人物であったのか。

彼は社交的な性格とは言えず、自宅と銀行以外への外出はほとんどせず、銀行の実質的なトップとして内部の経営会議以外に世間に出ることもなく、日本銀行の会議すら代理の者を行かせたほどであった。経済状況を把握するために、部屋数が 70 近くあった自宅(現在の東京都港区の鳥居坂）に来客用の迎賓館を造り、そこに経済学者、経済評論家、政治家、実業界等の要人を招き情報収集をした。マスコミも実態がつかめず、当時から「幻の財閥」とも評されていた。

明治 17 年（1884 年）に 18 歳でアメリカに 4 年間留学して金融を学び、帰国後は日銀で 2 年間勤務した。その後、27 歳の若さで川崎銀行頭取に就任して手腕を発揮し、川崎銀行を金融財閥に育て上げた。1927 年（昭和 2 年）に第百銀行を合併し、川崎第百銀行としたのを機に一線を退くも、財閥経営に強い影響力を持ち続けた。アメリカ留学の経験からか、自由主義的な社会気風に憧憬の念を抱いていた。第二次世界大戦についても、最初から日本の勝利は無理だと述べていたようである。アメリカの産業力や石油資源等の経済的側面だけでなく、精神風土も含めた国民性を十分に認識していたと思われる。したがって軍部に対しても、おもねることがない人物であった。当時の財閥は、国家社会主義に基づく資本間協調を基礎に国策協力を求められ、国の産業独占の圧力に押されて銀行再編を余儀なくされた。国と軍部が軍需産業に資源を傾斜しやすいように、大蔵大臣の命令によって銀行を潰したり、合併させたりできる法律や政令が存在したわけだが、残念なことに、川崎銀行は無理やり国策の一つに利用され、組み込まれていったのである。

一方、二代目川崎八右衛門は、建築に造詣の深い文化人でもあった。それが川崎銀行の世に名を残す建物が多いことに繋がっていく。ここに、二代目川崎八右衛門の建築の嗜好と矢部又吉に対する信頼の深さを物語るエピソードがある。

桂離宮をモダニズムの美学により再発見したとされる、ドイツの建築家ブルーノ・タウトは、ナチス台頭下のドイツを脱出し来日した。長谷川（2017）によると、当時、すでにモダニズムの建築家として名高かったブルーノ・タウトであったが、日本において思うような建築の仕事を残すことはできなかった。しかし、タウトの日記からその数少ない建築の仕事のひとつに「銀行家川崎氏の息子の住宅」があったことが確認できる。同様の指摘を中島（2017）もしている。

タウトの 1935 年の日記には、「銀行家川崎氏の息子さん」が、「お父さん」に内緒でタウトに自邸の設計を依頼したことが記されている。「お父さん」は、銀行つきの建築家「矢部氏」との協同を強く主張し、意見が合わず、結局、タウトによる設計は実現しなかった。タウトの日記からは、具体的に「銀行家川崎氏の息子さん」や「お父さん」が誰を指すのかは不明であるが、「お父さん」は「長男」の邸宅を「アメリカの或る建築家」に依頼したとあることから、「長男」はアメリカの建築家（出身は現在のチェコ共和国）アントニン・レーモンド設計の自邸を構えた「川崎守之助」、「お父さん」はその父「二代目川崎八右衛門」、「息子さん」は、矢部が昭和 10（1935）年に邸宅を設計した二代目川崎八右衛門の次男「川﨑大次郎」を指すものと思われる。この時タウトが提案した作品の詳細は不明であるが、桂離宮を再発見したモダニズムの建築家として、日本の民家を参照した簡素で機能的なデザインであったと想像される。対する矢部の案は、タウトが同日記に「（フランク・ロイド）ライトの流行を思出させるような作品」と評していることから、装飾的な作品であったと思われる。加えて、タウトの日記に「お父さん」は、地震を心配し「コンクリート構造を―必要以上に―堅牢にしてほしい」と要望されたという。この逸話からも、二代目川崎八右衛門の建築における趣向が見てとれる。ただし、川崎家は伝統的にレーモンドとの関係も深く、その後、大次郎邸はレーモンドの設計により建築され、矢部の川崎大次郎邸設計案も実現することはなかった[4]。銀行としての信用性を高める重要な要素としては、銀行建物の規模、外用、堅牢性などが挙げられるが、こうした川崎家の自邸に関する逸話からも、川崎銀行の建物が優美さにも注力して造られた背景がわかる。

川崎銀行が設計した建物の堅牢性は、すでに述べてきた通りだが、日本火災海上の社史[5]

---

[4] 川崎定徳株式会社の監査役・川崎善保氏からの証言。

[5] 日本火災海上保険株式会社企画部企画編『日本火災海上保険株式会社 70 年史』のこと。

には、大正 12 年（1923 年）の関東大震災後の状況を克明に記録した横浜市の報告書[6]から引用し、「太田倉庫と川崎銀行の建物しか残らなかった」とあり、「その後、数年間、建築専門家や他会社の幹部がわざわざこの建物を参観に来たほどである」とも記されている。なお横浜市の同報告書には「〈前略〉 斯くの如き耐震耐火の建物がもっと数多く有ったら、幾千の尊い人命が助かったことであろう 〈後略〉」とも記載されている。

さらに二代目川崎八右衛門が施工現場に対しても厳格に監督していたエピソードも残されている。戸田組旧友会（1959）の社内報によると、戦前、当時の戸田組（現・戸田建設）が請け負った支店の工事現場へ、二代目川崎八右衛門は毎日のように足を運び、現場の職人に色々な注文を付けるなど建築工程にも極めて高い関心を示し、特に基礎や内部の工事には弛みが許されなかった。したがって、施主が川崎銀行の場合、工事現場にはいつも緊張感が張り詰めていたという。このように二代目川崎八右衛門は建築に造詣が深かったことは事実だが、金融財閥である川崎銀行が、特に小口預金者を常に念頭に置き、地域の銀行としての本来の使命を果たそうと強く意識していた証しとも言える。個人の預金を大事にお預かりするという姿勢を貫き、庶民金融に重きを置いた銀行であった（堂下(2020)）。

ところで、当時の川崎財閥のグループに、川崎貯蓄銀行という国内 2 番目に設立された貯蓄銀行があった。この貯蓄銀行は明治 14 年（1881 年）に東海貯金銀行として設立され、その後、行名を変更する。川崎銀行は前年に設立されているが、銀行の同時設立が許された時代であった。当時、普通銀行の預金は 5 円以上からであり、1 銭以上の預金（小口現金）が可能なのは貯蓄銀行であった。普通銀行の顧客は、主に企業や一定の金員を持った預金者であるが、小規模小売業者やサラリーマンなどの勤労者は、貯蓄銀行を利用していた。昭和 2 年（1927 年）の昭和金融恐慌のような取り付け騒ぎが生じた場合、預金先の信用性は親銀行の規模によるところが大きかったので、預金者の信頼と安心を得るために、川崎貯蓄銀行の支店のほとんどが川崎銀行の支店内に置かれた。庶民のことを第一に考える銀行であったことがわかる。この経営理念も、川崎銀行の建物の親しみやすさに通ずる点がある。

また、川崎財閥はその歴史からも茨城、千葉に縁ある金融財閥であるが、千葉銀行の社史によると、戦前、同行（当時、千葉合同銀行）が経営難に陥っていた時、敢えて火中の栗を拾う格好で同行を救済するために、川崎財閥が大株主になり、経営幹部を派遣する等の支援を惜しまなかった（千葉銀行調査部（1975））。このことからも、所縁ある地域の商工業や生活者の暮らしを守ろうとした、庶民金融に軸足を置いた川崎銀行の経営哲学の一端をうかがい知ることができる。

---

[6] 横浜市役所市史編纂係編『横浜市震災誌』のこと。

さらに先述した通り、川崎銀行が現在の JR 総武線沿線だけでなく、JR 中央線沿線にも支店を多く構え、当時の新興住宅地にリテール金融の拠点として力を入れていた。現在、三菱ＵＦＪ銀行の支店はこれら沿線の各駅にあるほどだが、その系譜が川崎銀行につながる支店も少なくない。地域の中小企業に向けた融資の原資となる預金を小口であったとしても地元の庶民から集めるという庶民金融へのこだわりを二代目川崎八右衛門は持っていた。

６．現在も生き続ける川崎銀行の哲学　-川崎貯蓄銀行富沢町支店を考える-

平成 31 年（2019 年）2 月に三菱 UFJ 銀行水戸支店が撤退したのを最後に、銀行の店舗として使われている川崎銀行の建物は無くなった。しかし、現在も日本を代表するガラスメーカーの本社として生き続けている建物がある。昭和 7 年（1932 年）竣工、建築家・矢部又吉の設計による石造りの内装も非常に贅沢な旧川崎貯蓄銀行富沢町支店（写真 14 を参照）である。同支店は後に常陽銀行堀留支店として利用されていたが、平成 12 年（2000 年）からＨＡＲＩＯ株式会社の本社として、ほぼ当時の姿のまま使われている。同社の経営者は、この建物が戦前戦後を通して遺っていること、今後このような貴重な建物は二度と造られないであろうこと、また、耐熱ガラス技術の継承使命を自負する経営者として強く共感した思いから、この建物を保存するべきだと考え、平成 12 年（2000 年）に購入を決めた。銀行建築に込められた川崎銀行の経営哲学が時代

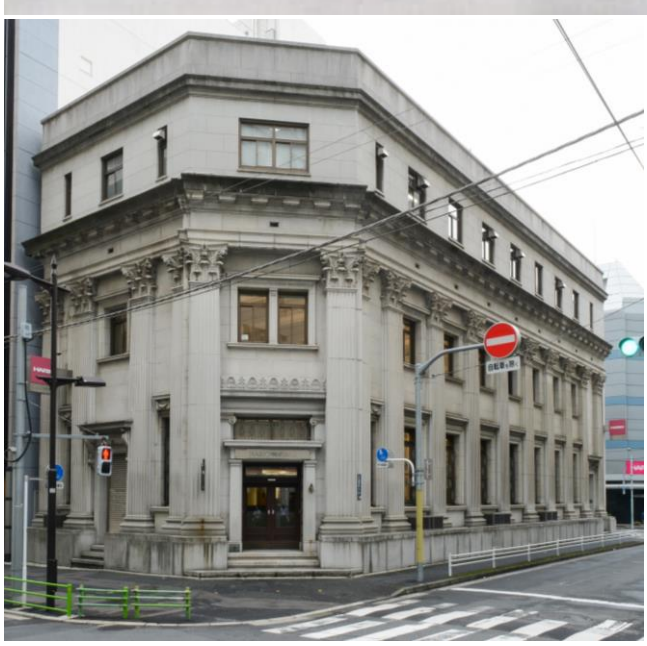

写真 14　川崎貯蓄銀行富沢町支店（上写真は竣工時、下写真はＨＡＲＩＯ株式会社の本社ビル。大部分が現存されている（竣工当時は２階建）。なお設計は矢部又吉）

を超え、大正 10 年（1921 年）創業の日本を代表する耐熱ガラスのメーカーの経営者の心を魅了したのである。

平成 23 年（2011 年）の東日本大震災時には、建築当時のままの中 2 階の石造りの部分はまったく揺れず、外から建物を見ていた社員も、ほんの一瞬揺れたように感じたぐらいだったと言っている。まさに堅牢であった。

平成 15 年（2003 年）に文化庁より「貴重な国民的財産」として、日本橋本社ビル登録有形文化財として認定された。企業が果たすべき社会貢献の一つの具体的な事例でもある。

７．結び　-川崎銀行佐原支店を考える-

明治 13 年（1880 年）の川崎銀行開業当初から佐原（現在の千葉県香取市）に出張所として置かれ、昭和 18 年（1943 年）の合併と同時に三菱銀行に引き渡された川崎銀行佐原支店（写真 15 を参照）は、川崎銀行が長い歴史の中でこだわってきた金融機能を有する地域密着の店舗であった。長年にわたり佐原の街の中心であり、街の顔であり続けた。三菱銀行に吸収合併されるまでの間、川崎財閥としての金融活動は、六十数年間続いていた。

街並み保存の観光拠点施設として活用され、30 年が経ったが、現在の佐原三菱館という名称は、建物自体の本質や歴史をあまり物語っていない。なぜ、川崎銀行が佐原にあのような特徴を持った建物を建てたのかを知ることで、佐原がどのような土地であったのかを、「川崎銀行の遺構」というパズルのピースを組み合わせることで理解を深めることができた。佐原三菱館という名称が、三菱財閥や岩崎家が、佐原に関係しているように誤解させてしまっている面もある。岩崎家が佐原の土地や建物に特段の関心を寄せていなかったことは、三菱史料館（東京都文京区湯島）に、佐原の三菱館に関する資料が無いことからも窺われる。佐原三菱館という名前が誤解を生んでいると痛感せずにはいられない。佐原の歴史を考えた時、川崎銀行の果たしてきた意義と建物の存在は大きく、重要である。

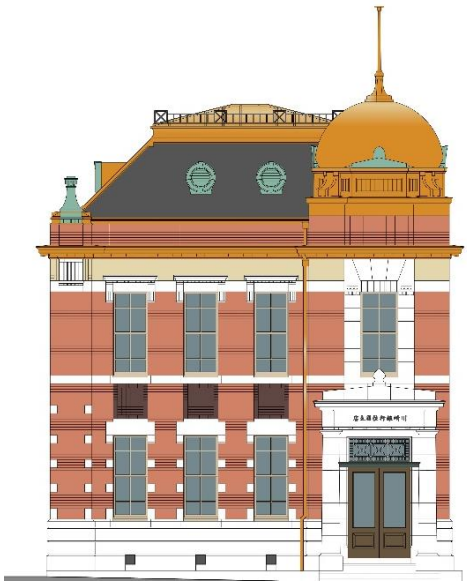

写真 15 川崎銀行佐原支店（上写真は竣工時、下図は修復のためのドラフト。設計と施工は清水満之助商店、現在の清水建設）

今回、川崎銀行の遺された銀行建築を

通して、川崎財閥と川崎銀行の経営哲学における一端を知ることができた。その所縁ある土地の銀行遺構である佐原三菱館に、今後、川崎銀行、または第百銀行の名が残ることを願って本稿の結びとする。

以上

＊ 謝辞：本稿の内容は「東京情報大学・香取市 地域連携フォーラム 2020」に基づきます。そして、本フォーラム開催に当たりご協力を頂いた香取市市民、及び香取市役所の皆様には心より感謝いたします。特に。香取市教育委員会生涯学習課の副主幹・坂本行広氏には、資料提供等のご協力を頂きましたことに心より御礼を申し上げます。また、東京情報大学の非常勤講師・伊藤幸郎氏には、フォーラム準備等にご協力を頂きました。誠にありがとうございました。最後に、本フォーラムの実施に向けた調査と開催は、東京情報大学総合情報研究所によるプロジェクト研究助成金(2019 年度)の成果であり、支援を頂いた関係各位には深謝いたします。

【引用文献】

川崎定徳(2014)『川崎銀行史 概史と建築物』川崎定徳株式会社発行，私家版

佐倉市教育委員会（2021）『千葉県指定有形文化財 旧川崎銀行佐倉支店 耐震補強工事報告書』佐倉市発行

世田谷美術館（2009）『内井昭蔵の思想と建築 展図録』世田谷美術館発行

千葉銀行調査部（1975）『千葉銀行史』千葉銀行発行，社史

堂下浩（2020）「三菱銀行による第百銀行の吸収合併に関する旧･川崎財閥からの検証 － 佐原三菱館の歴史から紐解かれる川崎銀行(第百銀行)を巡るパネルディスカッション －」早稲田大学クレジットビジネス研究所, No. IRCB20-001

戸田組旧友会（1959）『創業追想』戸田建設発行，社内報

中島智章（2017）「ブルーノ・タウトと矢部又吉」『NICHE 04』Opa Press

日本火災海上保険株式会社企画部企画（1964）『日本火災海上保険株式会社 70 年史』日本火災海上保険株式会社，社史

日本建築士会連合会（1941）「故正員矢部又吉君略歴」『日本建築士』日本建築士会連合会発行, vol29 no.1

長谷川章（2017）「日本における全設計活動」『ブルーノ・タウト研究』ブリュッケ

平山育男、松波秀子（2005）「近代建築における建築会社設計部技術者の研究―大友弘の業績を通じて―」『住宅総合研究財団研究論文集』住宅総合研究財団, Vol.31

藤森照信（1993a）『日本の近代建築（上)』岩波書店

藤森照信（1993b）『日本の近代建築（下)』岩波書店

横浜市役所市史編纂係（1926）『横浜市震災誌』横浜市発行

【写真出典】

写真 1 ,2,3,4,6(右),7(右),8,9,10,12,13,15(上)：『知られざるドイツ建築の継承者－矢部又吉と佐倉の近代建築』（佐倉市立美術館刊）

写真 5：「八王子空襲焼け跡写真」八王子市有形文化財（歴史資料）

写真 6（左）：『帝都復興記念帖』（昭和 5 年刊）より（中央区立図書館蔵）

写真 7（左）：『日本地理風俗大系 大東京 豆南諸島 委任統治南洋』（昭和 14 年刊）（中央区立図書館蔵）

写真 11：紙焼写真(全景)

写真 14：『建築写真集第三輯』（竹中工務店提供）

写真 15(下)：修復工事のためのドラフト図は香取市より提供